

平成31年度
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
 成果報告書

団 体 名	公益財団法人 神戸市民文化振興財団	
施 設 名	神戸文化ホール	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・普及啓発事業	
内定額(総額)	14,316	(千円)
公 演 事 業	6,160	(千円)
人材養成事業	0	(千円)
普及啓発事業	8,156	(千円)

(3) 平成31年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	神戸文化ホール インリーチ・アウトリーチ	2019年5月～2月	出演：神戸市混声合唱団・神戸市室内 管弦楽団ほか	目標値	9,000人
		小学校、病院ほか		実績値	約8,200人
2	KOBE JAZZ DAY 2019	2019年4月7日	①ホールライブ ②野外ライブ&飲食ブース ③体験ワークショップ	目標値	4,750人
		神戸文化ホール周辺		実績値	5,333人
3	神戸文化ホール サマージャンボリー2019 オカシナセカイ 「グレーテルとヘンゼル」 公演など	2019年8月	①演劇公演「グレーテルとヘンゼル」 ②音楽ライブ「オカシナセカイでこ んにちは！」③フェスティバル	目標値	2,500人
		大ホール舞台上		実績値	のべ 1,200人
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p> <p>当財団では、「中期経営計画 2021」において、基本理念として自らの社会的役割（使命）を「神戸市民の文化活動の振興に資する事業を行い、もって個性豊かな魅力ある神戸文化の創造に寄与する」こととし、この基本理念と合わせて「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」（以下：劇場法）及びその指針に従って「事業方針」を立てている。</p> <p>当該「事業方針」では、神戸文化ホールをホームグラウンドとする神戸市室内合奏団と神戸市混声合唱団や国内外で活躍する若手アーティスト活かした「芸術文化の創造・発信」、教育機関などと連携したインリーチ・アウトリーチを中心とする「普及啓発」、地域の住民とともに歩むことをテーマにした「地域社会の絆の維持、強化、市民の文化活動支援」を大きな柱とし、令和2年度もそれらに基づいて各事業を組み立て取り組んだ。</p> <p>中でも今年度の新規な事業「inseparable 変半身（かわりみ）」では懸案でもあった他都市の公立文化施設との共同製作で新進作家との連携事業を実現し、「神戸文化ホールサマージャンボリー」では新しい広場や世界の窓を標榜するコミュニティの交流拠点としての劇場を目指し、これまでにない取り組みにも着手した。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p> <p>助成財源のおかげで、神戸市室内管弦楽団と神戸市混声合唱団を活かしたアウトリーチ・インリーチ事業が着実に成果を積み上げながら継続できている。教育との連携により未来を担う子どもたちに平等な文化芸術体験を担保していくことは社会的にも大きな意義を持つ。</p> <p>また、これまで懸案となっていた自主製作による創造発信にも、経験豊かな他都市の財団との共同事業により着手できたことにより、様々な知見経験を共有することによって当財団の人材育成、ネットワーク形成、マネジメント力の向上にもつながっている。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

1) 公演事業について

①クラシック・プラス Vol.3 はシリーズ最終ということで、これまでに積み上げてきた成果の集大成として神戸出身の現代作曲家 一柳慧と新作発表に取り組み企画力を磨きあげることが出来た。また関連事業の公開講座や教育プログラム、地域連携を図るまちなかコンサートは実績や信頼関係を構築しながら進化させることが出来た。但し、集客には課題が残り、引き続き周辺で開催されるクラシックコンサートとの差別化や相互連携の可能性などを検討しながら今後も努力を重ねたい。

②inseparable「変半身(かわりみ)」では、初めて他館(三重県文化会館、ロームシアター京都)と共同で演劇作品の企画製作に取り組んだ。芥川賞作家と岸田戯曲賞作家が初めてタッグを組み、オリジナル作品を初演し、実験的なクリエイションや演出に挑むなど初めて尽くしのことも多く、ホールの新たな発信やスタッフ養成面での成果は大きかった。

2) 普及啓発事業について

①インリーチ・アウトリーチ事業は普及啓発の柱であり、地域の小学校や医療施設と連携し協力体制を築き上げながら取り組み続けており、相互の信頼関係が着実に構築されている。今後は実績を活かして、多忙を極める教育・医療現場の意見を組み取りながら双方向で「新たなプログラム」を開発し神戸モデルとして発信したい。

②KOBE JAZZ DAYは「ジャズの街」という地域の特性とホールの可能性を広げることを目的に取り組むもので、回を重ねる毎に出店や連携イベントが拡大している。今後は観光という視点をより一層重視し、これまで以上に地域振興に寄与していくことを目指す。

③サマージャンボリーでは、これまでホールを訪れる機会の少ない子育て・働き盛り世代を対象に、観賞に留まらず参加交流型のプログラムを組み込むことで気軽にホールを訪れ親しむことを目的とした。目標は概ね達成できたが、夏休み中の実施では必ずしも土日が有効ではないことが判明した。今後の実施に反映させたい。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

1) 事業期間

年間を通しての事業である「アウトリーチ」については、新型コロナウイルスの影響で日程調整をすることもあったが、概ね計画通りに実施することが出来た。また他の事業も屋外イベントも含まれているが全て計画通り順調に開催することが出来た。但し、開催日程については、昨今のライフスタイルの多様化も鑑み、客層の設定や近隣の他イベントのリサーチも含めて今後も十分に検討することが重要。

2) 事業費

概ね計画通りに実施することが出来た。特に挑戦的で実験性の高い公演事業や普及啓発型の収入を得にくい事業については他の助成金や地元企業によるスポンサー支援なども積極的に活用した。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

公演事業では、ホール付の「神戸市室内管弦楽団」と神戸ゆかりのアーティストとして、一柳慧氏に作曲を委嘱、鈴木優人氏を招聘した「クラシック・プラス Vol.3」を開催。型通りのクラシックにはまらない、新しいクラシックの地平を切り開く現代音楽家と新進気鋭の音楽家を指揮者に迎えることで、神戸人による、神戸のための特別な音楽会を実施することができた。また公演名の「プラス」にあるように、クラシック音楽に新しい視点をプラスすることはもちろん、クラシック愛好家以外の、神戸人の関心もくすぐるために、神戸タータン、神戸スイーツ等の関連商品も販売することで、幅広い世代に新たなクラシックへの関心を持ってもらうことができた。これと同時に、市内高校生を対象に出張公演によってプロの演奏を届け、地元商店街でのまちなかコンサートでは、普段クラシックに興味のない人を巻き込むことで、その魅力に気づいてもらえるようなプログラムを行うことができた。

もう一つの公演事業 inseparable「変半身（かわりみ）」では、公共劇場間の連帯力を育むと同時に、公共劇場だからこそ生まれた連携によって、前衛的な演劇作品の制作を実施できた。単館だけでは培うことが難しい、経験値が必要な制作のノウハウや、業界人材とのネットワークを、連携によって補うことが可能になっただけではなく、東京に集中しがちな小劇場向けの前衛的な演劇作品を神戸でも公演できたことは、公共劇場連携による大きな成果だったと考える。また、都心で活躍する演劇人によるワークショップ、トークイベントの実施も同様の理由による点で、地域の文化拠点としての機能を模索した結果の成果だと考える。

普及啓発事業の「インリーチ・アウトリーチ」では、ホール付の楽団「神戸市室内管弦楽団」と「神戸市混声合唱団」を有する当財団の強みを生かした事業が展開できた。オリジナル制作の子ども向けオペラ「泣いた赤鬼」を、小学生対象に劇場に招待することで、劇場を訪れてもらい、劇場を知ってもらい、オペラを体験してもらうという機会を創出した。

普及啓発事業の「KOBE JAZZ DAY2019」では、神戸市の文化拠点として、ジャズのまち神戸をうたう、神戸の街の文化振興に寄与することができた。ホール周辺を舞台に、地元商店街、観光、民間企業、行政とも結びつき、事業を展開することで、まちのにぎわいを創出した。また、ホールを拠点にすることで、普段接点のない年代間での結びつきを生み出し、ジャズを通じた世代間交流を実現した。

普及啓発事業の「サマージャンボリー2019」では、少子高齢化が進む神戸市において、劇場の魅力を子どもたちにも届けようと、子どもが劇場を訪れる喜びを提案する事業として実施した。一日で、劇場に関わる様々なプログラムを体験できるようにすることで、劇場の様々な魅力に触れてもらえる機会を提供できた。神戸文化ホールは、40年を超える歴史を持つが、それだけに施設の老朽化は進んでおり、なじみの高齢者にとっては、愛着のある存在ではあるが、新規の利用者にとっては、古い施設のイメージをぬぐい切れず、若年層の利用率は低い。夏休みの期間に、子世代をターゲットにすることで、その親世代も、普段関心のなかった神戸文化ホールに足を向けるきっかけを生み出すことにつながったと考える。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

公演事業では、公演を実施するだけではなく、アウトリーチ、まちなかコンサート、トークイベント、ワークショップ等、関連イベントも実施することで、公演に関心のある人々以外にも、事業を知ってもらう機会を設定した。アウトリーチでは、次代を担う中・高校生を対象に、まちなかコンサートでは、きっかけがないと興味を持つことのない市民を対象に、トークイベントでは、原作の文学作品に関心をもつ図書館の利用者を対象に、ワークショップでは、演劇を観劇する以外の楽しみも求めている人々を対象にするなど、一般的な公演事業からその対象を拡大することで、舞台芸術の魅力を広く発信した。それぞれのプログラムで、劇場とは異なる場面で、劇場につながるプログラムを提示することができたと思う。

公演においても、神戸ゆかりの出演者によるコンサートを開くことができ、現代音楽をプログラムの中に盛り込むことで、クラシック愛好家には新たな地平を、そうでない人にもクラシックの新たな魅力を発信することができた。演劇公演では、神戸では鑑賞機会の少ない、東京を拠点に活動する小劇場の演劇を実施することで、普段と異なる演劇の一面を楽しむ機会を生み出した。

神戸文化ホールとしては、異例の小劇場演劇というプログラムを事業ラインナップに組み込んだことによって、これまで関心を持っていなかった観客層に劇場の存在を振り向かせる契機となった。

普及啓発事業では、劇場という場を知らない子どもたちを劇場に招待することで、その魅力を肌で知ってもらう機会を提供できた。これとは逆にアウトリーチでは、劇場を訪れたくても訪れることのできない入院患者のもとにアーティストを派遣することで、舞台芸術の魅力を伝えるだけでなく、心身の安らぎを届けることに貢献した。

「KOBE JAZZ DAY2019」では、劇場から飛び出し、地元商店街、観光、民間企業、行政とも結びつくことで、多様なステークホルダーとの関係性を築きながら、市が進めてきたジャズのまちこうべの魅力を市民に広く発信することに成功した。また、出演者に神戸を代表するユースジャズオーケストラや勢いのある神戸出身アーティストを起用することで、神戸のジャズ関係者を盛り上げるだけでなく、若手の出演者を起用することで、同年代の観客にも舞台の楽しみ方に新鮮さを提供できた。

「サマージャンボリー2019」では、小学校低学年を主なターゲットに据えることで、劇場を知らない子ども達に、その魅力を発信することができた。また、引率の親世代にも、劇場を訪れてもらうことで、日ごろ利用する機会のない劇場の存在を知ってもらうことにつながった。今回で二回目の実施になるが、毎年継続していくことによって、市民に定着した事業として認知が進めば、舞台芸術に触れる機会を、特別なこととしてではなく、身近なものとして広げていくことができるのではないかと、劇場としても期待している。

それぞれのプログラムが、劇場の内外に関わらず、プログラムを実施することで、既に劇場の楽しみ方を知っている人だけでなく、舞台芸術の楽しみを届けることで、地域全体で舞台芸術に触れる機会を創出し、神戸における文化芸術の発展につながったと思う。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

神戸文化ホールでは、神戸市の基幹文化施設・文化芸術の創造発信拠点として、ホール付きのプロの楽団である神戸市室内管弦楽団、神戸市混声合唱団の公演を柱に、公共劇場として舞台芸術の可能性を広げる事業に挑戦している。また、神戸の文化を担う若手アーティストへの発表機会の提供、招待公演やアウトリーチ等社会に対して積極的に働きかけるなど、継続的に幅広いファン層の獲得を図るとともに、まちの活性化の一翼を担うべく事業を展開している。

本事業では、通例の定期演奏会に加えて、現代音楽による新たなレパートリーを生み出すことでクラシック音楽のファンにも新鮮な流れを送り込むことを意識した「クラシック・プラス Vol.3」をはじめ、まちなかコンサート、小学生向けオペラの招待公演、病院施設へのアウトリーチ等、「音楽のまち神戸」を推進する事業を実施した。また、ジャズも盛んな神戸のまちで次世代を担うユースジャズオーケストラ等にも発信の場を提供し、まちをあげて盛り上げる「KOBE JAZZ DAY2019」を実施。同様に、小学生を対象としたオリジナル制作のオペラ「泣いた赤鬼」への招待公演や、全館をあげた親子向け劇場体験プログラム「サマージャンボリー2019」を行うなど、将来の鑑賞者を育て、神戸発の若手の才能を見出す場を設けるなどして、地域の文化力の長期的・継続的な基盤づくりをすすめた。加えて、演劇事業「変半身」では、当劇場としては新鮮なジャンル、小劇場演劇に新規事業として取り組んだという利点だけでなく、他府県の文化財団と共同制作を行うことで、事業の連携によるノウハウの共有、人材の交流による職員の能力向上、及び新しい芸術表現の創造の場を担う職員の基礎固めという意味での成果も大きいものとなった。

以上のような、市民が身近に舞台芸術を鑑賞できる鑑賞型事業と、アーティストと市民の触れ合いの場となる普及啓発事業を効果的に実施することで、事業展開に広がりをもたせ、全市的な文化力の向上を図ることにつながることができた。

今後は、本事業で実践した、劇場単独による事業の組み立てではなく、地域、初等・中等教育機関、医療施設、他都市文化財団等々とのつながりの中での事業構築、これらのネットワークを活かした若手アーティストを支援する仕組みとその場の提供、そして、市民に向けた新しい視点での鑑賞の機会の提供、これらが連続的、継続的、そして長期的に機能する事業の実施をもって、公共劇場としての機能強化をさらに図っていく。